

1957年アランドローランド彗星とムルコス彗星が出現して、彗星の天体物理学的観測は大発展をなした。今回の池谷・関彗星についてもこれから一・二年の間に読みきれないほどの研究論文が出版され、彗星天文学は又々大飛躍をすることだろう。

二人の日本人によって世界で最初に発見され、日本の空で太陽に大接近したこの彗星が、今太陽から遠ざかりつつあるが、最後の観測の記録を日本でとりたいものだと思っている。幸い次の秋に74吋が使える機会もあることだから。  
1965 12月22日記

## 池谷・関彗星の発見状況

### 池谷 薫\*

台風24号の通過直後の1965年9月19日午前3時よりいつも同じ様に屋根の上に作った台に、自作の口径15センチ、22倍のニュートン式反射望遠鏡に35ミリのエルフレ式アイピースを取付け搜索を開始しました。

始めた頃は南半天分程晴れていましたが、1時間近く搜索している内に、雲が広がり東天が帯状に晴れているだけとなりました。仕方無くその方向の低空より、見始めたらすぐにボンヤリした光斑が視野に入ってきました。直感的に怪しいと思い、時計を見たら丁度、4時でした。星図で確かめもしないですぐスケッチをしました。

直径は約5分、中央程やや明るくなっており、視界に見えた恒星を焦点外像でボカして比較した所、約7等と思えました。

その後、残りの空を明方まで搜索し、家に入って星図と較べましたが、やはり出ていませんでした。位置はウミヘビ座西部、赤経08時45分、赤緯南08度37分でした。

かなり明るいので彗星らしいと思い至急電報で東京天文台と倉敷天文台とに次の様に報告しました。

スイセイカ16ヒ4ジ」8ジ45フンミナミ8ド37フン7トウ」イケヤ

1962年1月2日より搜索時間を記録し、今までに1963 $\alpha$ 彗星は、109回目135.5時間、1964 $f$ 彗星は、358回目617時間25分、今回の池谷・関彗星の時は、536回目926時間20分でした。

その後、浜名湖弁天島の空は一週間も曇り続きでしたが、(観測可能明け方に限り)、21日オーストラリアで確認され安心しました。

\* \* \*

### 関 勉\*\*

その前夜(1965年9月18日)台風24号の通過した

高知の空は、久々の快晴に恵まれた。

愛用の口径88mm 17×の comet シーカーで、夜半の西天一帯を搜索した私は、更にその翌朝の4時、東の地平線の上にレンズを向けたのであった。折から、下弦をやや過ぎた月が、搜索方向にあって、空の状態は必ずしも良好ではなかったのであるが、観測を始めて15分を経過する頃、突然、一異状天体が私の視野に映ったのであった。

私は、早速、手許のノルトン星図を調査したが、それらしい星団や、星雲の記号はなく、平常見馴れない天体であったので、モーションを確かめるまでもなく、新彗星と判断したのであった。この発見は、1950年8月、私が彗星の搜索を始めて以来、総計1249時間後のことであった。

発見当初の彗星のイメージは、中心部が稍明るい雲霧状で、尾らしいものは見えず、コマの視直径は3'~4'、実視光度は8等と目測した。念のため、視野内に、2個の光度比較星を選んで、バイエルグラフやミフアイロフ星図等で調査したところ、8等という目測には大差なきものと思われた。発見の位置は、バイエルグラフによって測定したものを、1950.0に分点変換したもので

U. T                       $\alpha$                        $\delta$

1965 Sept. 18.805      8<sup>h</sup>45<sup>m</sup>.4      -8°38'

を得た。この発見位置は、同日午前6時20分、発見電報の様式に従って、東京天文台に打電された。

(31頁より続く)

因になるのではないけれども、核の近傍にイオン生成反応に好都合な状態を作り出す役目を果たすのであろうと思われる。

(註1) Halley 彗星1910で観測された、核を中心にして拡がって行く光冠(Halo)の拡がる速度をとっている。

(註2) この粒子束強度は最近のロケット観測等による値に大体一致している。

\* 日本天文学会会員

\*\* 日本天文学会会員